

二年前の昭和三十六年六月二十七日は、わすれようとしてもわすれられない水害だった。

その日の午後、私たちは、部落ごとにならんで帰った。田沢川の水は真っ黒い水がゴーゴーとあふれ出て流れていった。雨は、ジャンジャンふるし、わたしはどうしようもなかった。しんりょう所のところの橋をわたって行った。

家につくとおかあさんやおばあさんが、家のものをこびだしていた。わたしも、さっそく手だった。

五時半ごろ、家があぶなくなってきたので、私と S は M ちゃんの家へひなんした。M ちゃんの家へ来るとも、家のことがしんばいぞ、おちついたりいれなかった。

少したつと親せきのおばあさんが、わたしをよびに来ってくれたので、また親せきの家に行った。雨はゴーゴーとふっていた。わたしのズボンやふくは、中から中まぎびしよぬれたったけれど、おそろしさでなにも、かんじなかった。親せきの家に来ると、中にはいつてうろろして、前々ほうで、ドドドドドと大きな音をたてて山がくずれまわった。わたしは、すぐ外に出て行って見た。もう一けんの家は、こわされていた。

どの所へおかあさんやおとうさんが、おぼろしくなってきた。おかあさんたちは、ひざまである水をおしのけ、やっ来たのだぞうだ。

どこのおじさんが、親せきの家の上の山もくずれかかっているといつてくれた。私たちは、またにげた。

ねる時は、Kという家に行った。おむすびをくれたけれど、おそろしさのあまりのどにとうらなかつた。ふとんをしいまくれたけれど、みんなぼうつとしまずわつていた。

つぎの日の朝まだ雨がふつていたけれど、二十七日の日よりは大ぶりではなかつた。

わたしはもう家は流れたものと思つていた。下のほうへ見に行つて来た人が私の家はまたのこつてゐるにと、いつてくれた。おとうさんは、ほんきにしないで、見に行つたら、ほんとうにのこつていたぞうだが、家の中はすなや土が、ゆかから上までつもつていたという。でも、私はのこつてゐるよかつたなと、ほつとした。

わたしは、さつどくつぎの日から土だしをほじめた。

田沢川がなくなつた人は九人もおたぞうだ。こんなにもおそろしかつた水害だつたのだ。

私たちは、こんなおそろしい水害が二度とまたこないようにといのつてゐるのだ。